研究

徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち（その三）

―池田屋事件から徳山藩内訌まで―

会員　小林省三

はじめに

日本開国の引金となった嘉永六年（一八五三）六月三日のペリー来航時から文久三年（一八六三）八月一八日の政変により攘夷派長州藩が京都から追放されるまでの約一〇年間に発生した事件を対象として、その概要を本誌第二三・二四号で報告した。

現在も幕末維新期の各段階の事件において活躍した郷土の群像たちについて調査を進めているが、ここでは、元治元年（一八六四）六月五日の〔池田屋事件〕に巻き込まれ負傷した内山国雄と徳山藩内訌時に活躍した群像たちの内、保守（恭順）派の飯田厚蔵を紹介する。

一、池田屋事件と徳山藩士内山国雄

本節では、池田屋事件に拘った唯一の徳山藩士内山国雄を紹介する。

元治元年六月五日京都で事件が起こった。

この事件は、文久三年八月一八日の会津・薩摩藩を中心とした公武合体派による長州藩追い落としとなった「八月十八日の政変」（堺町御門の政変）に対する尊攘派の巻き返し計画に対し、新選組が奇襲作戦で先制攻撃に出たものである。

新選組の密偵が、京都河原町通り四条上がる筑前藩御用立の桝屋喜右衛門が、実は近江の志士古高俊太郎であることを察知した。そこで、新選組は六月五日朝、彼を捕えて拷問の末、六月五日夜の志士たちの池田屋会合を自白させた。

この池田屋への先制攻撃では新選組と会津・桑名・彦根・加賀・一橋の藩兵計約一六〇〇人が出動したといわれる。また記録によれば、この事件で志士側二四人、襲撃側五人の死亡者が出たという。それは一種の戦争状態であったが、在京中の徳山藩士内山国雄もこの事件に巻き込まれて負傷した。

内山国雄は、弘化二年（一八四五）九月二四日、周防国徳山で生まれた。国雄は初め久米之進、後内田五郎といい、また内山正太郎、正雄と称した。

文久年間、内山国雄は感ずるところがあり京都に上った。その折、文久二年（一八六二）五月に上京し、文久三年八月一八日の政変時まで、徳山藩周旋役や親兵となり京都で活躍していた信田作太夫に従い尊攘運動に奔走した。その後、国許の「文久馬関戦争」の危機を知り、帰国して馬関に至り奇兵隊に入隊した。

『奇兵隊日記』（註①）によれば、彼は文久三年一〇月から一一月七日にかけて奇兵隊員として活躍していたことがわかる。その後奇兵隊を脱退し、大楽源太郎（月性に薫陶を受けた後、安政二年に二四歳で広瀬淡窓塾に学んだ）に教えを受けた。

その後彼は再び京都に上り、平安古の吉松塾では大楽源太郎と同門であり、文久三年二月に上京し京都で尊攘運動に挺身していた久坂義助（玄瑞）に従い国事に奔走していたが、元治元年六月五日の京都池田屋の変に巻き込まれ負傷した。

内山国雄は、その後徳山に帰り、元治元年八月頃には国許に居て、井上唯一と拘り合いをもっていたことを、次の史料で知ることができる。

〔有志詰問録〕　浅見政一氏所蔵

〈前文略〉同九月五日快晴、八時より於御客屋井上唯一御調へ〈中略〉○問内田五郎九日ノ日ニ其

方宅江参リ候ハ右同志二ハ無之哉△答成ル程私方江鳥渡参リ候へ共、右等ノ義咄合ハ不仕候〈後文略〉（註②）

慶応元年（一八六五）四月一四日富田新町の浄真寺を陣営として山崎隊が創設された。（註③）

その折内山国雄は、文久三年六月に京都留守居役を児玉次郎彦と交代し、帰国していた最初の山崎隊総官（総督）を仰せつけられた大野丹下（後に直輔）等と謀り、山崎隊の創設に大きく貢献した。また、山崎隊参謀として徳山藩の改革（倒幕）派政権の出現に尽力した。そのことは、次の史料で知ることができる。

徳山の正俗

宍戸備前前原彦太郎六月十三日徳山着十四日淡路守に使命を述べ十五日再び謁す然るに淡路守已に二人来徳前に富山要人（源次郎・當職）本田眞（側用人）梅地央（兩人役）井上清兵衛（阿兵衛・評定役）を罷む而も富山等猶陰に機務に参す十六日夜二人は徳山の老臣福間一内（俗政府以来謹慎中）森主水（加判側用人）櫻井龍右衛門（側用人）及び山崎隊大野丹下（直輔）福間榿太郎（尾越蕃輔）内田五郎（内山正太郎又正雄・参謀）等を旅館に招き大に議する所あり十七日大野丹下等淡路守に謁し本城清児玉江村河田井上浅見等の寃を辨し富山要人を彈劾す淡路守亦悟る所あり即夜令を發し改革を斷行し〈後文略〉（註④）

内山国雄は、慶応三年（一八六七）三月一〇日には山崎隊員として奇兵隊を訪問しており、（註⑤）その後同年献功堂会議所詰を仰せ付けられた。明治元年（一八六八）八月七日、徳山藩は、朝気隊八一・斥候銃隊九・武揚隊四〇・順詳隊八二名を合併して献功隊を編成した。その折内山国雄は、献功隊書記に任命されている。

明治元年九月七日、萩藩整武隊とともに越後・秋田方面応援出兵の朝命を受けた徳山藩は、山崎隊一中隊と献功隊一中隊を明治元年九月二三日に徳山より進発させた。内山国雄も献功隊書記として、この作戦に参

加した。そのことは、次の史料で知ることができる。

〈前文略〉献功隊の方は同隊取締兼参謀林與、書記内山正太郎、斥候谷速水、山県與三、控士官庄原藹士、一番小隊司令庄原轟之允、半隊司令松野覃熊、響導山県晋太郎、淺海義衛、松野操、長濱義治、二番小隊司令神代恰、半隊司令児玉源太郎、響導岡澄江、伊藤為蔵、鹽川靜馬、鷹巣練治、兵士九六人輜重方信田清兵衛、棟居義太、藤岡與一郎、附属四人人夫三十人外に病院佐伯鼎造、四熊宗庵、醫員杉修治、山田良弼、上領建策、會計井上市蔵、其外人夫三人なり〈後文略〉（註⑥）

その後、献功隊一中隊は一〇月二日、三田尻を出港し、一〇月九日に雪の土崎港に着き、青森転陣の命を受け雪の中を行軍して一一月六日青森に着陣した。

青森に布陣していた献功隊は黒田清隆参謀の第三軍に属し、明治二年（一八六九）四月一六日蝦夷地渡島半島の江差に上陸した。その後、内山国雄は五月一八日の箱館平定（五稜郭開城）まで各地に転戦し、大川台場の守備戦で戦死した取締兼参謀の林與をよく助け軍功を上げた。七月二〇日三田尻に凱旋後徳山に帰り、明治三年（一八七〇）には徳山藩政府記録役を命じられた、明治四年（一八七一）七月一四日の廃藩置県実施後の明治五年（一八七二）には東京に出て公用人として勤務し、後に開拓使九等出仕に任命された。その後開拓使七等出仕に累進し、松前県官取計兼任中、県下内に発生した騒擾事件の処置を誤り、その責任を取り、兼任を解任されたが後に内務省七等出仕となり、警保局在勤中の明治八年（一八七五）四月二二日、東京で死去した。享年三〇歳。

二、徳山藩内訌と保守（恭順）派藩士飯田厚蔵

本節では、徳山藩内訌事件に保守（恭順）派として大きく拘った飯田厚蔵を紹介する。

幕末維新期、全国各藩の多くには保守・革新（恭順・倒幕）二派があって、互いに確執を続けていた。徳山

藩でも「八月十八日の政変」（堺町御門の政変）の結果両派の対立は極めて顕著となり、特に革新（倒幕）派は勢力を失い、急に藩内の保守（恭順）派が勢力を伸ばしてきた。なお引き続く元治元年七月一九日の禁門の変の敗北によって、長州藩は朝敵の汚名を蒙り、続く宗藩の同年八月五・六日の馬関戦争の敗北、更に幕府による征長令の布告などにより、徳山藩保守（恭順）派はますます勢力を強め革新（倒幕）派を逆徒と称し、藩主淡路守を保守（恭順）派に引き入れ、革新（倒幕）派に種々の冤罪を被わせて、政治の要路より斥けた。そして徳山藩では、老臣富山源次郎を主軸として本田和多利・井上誠兵衛・飯田厚蔵等の保守（恭順）派が政治の要路にたち、宗藩の保守（恭順）派と気脈を通じてしきりに革新（倒幕）派を弾圧した。

このことを大いに憤慨し、同年八月九日の夜河田佳蔵・本城清等が同志一〇数人と共に不意に富山源次郎の居宅を襲い天誅を加えようとしたが、失敗し佳蔵は投獄された。

この事件を契機として保守（恭順）派政府は革新（倒幕）派を殲滅しようとして放火の冤罪を被せたり、藩主廃立の陰謀ありだと種々の罪名を付して革新（倒幕）派の藩士を投獄した。そして、徳山七士の殉難事件が発生した。この事件の一端を次の史料で知ることができる。

〈前文略〉八月九日は河田佳蔵等富山源次郎が俗論黨巨魁なるを以て刺殺せんとし果さず岩国に奔る岩国より逮捕せられて送還し濱崎の獄に投ぜらる十月二十四日早朝獄庭に誘ひ出され處刑となる年二十三歳江村忠純本城清等に從ひ學びたり八月十一日風月の官職は褫奪せられ俗論黨の徒十二日家に來りて縛し大成寺關門外にて斬殺せらる年三十三歳此月十一日亦清の官職を褫ぎ禁錮し十二日移して學館の空舎に囚へ十七日除族濱崎獄に投ず慶應元年正月十一日毒殺せんとす果さず十四日新宮海濱に於て縊殺せらる年四十一歳淺見安之丞〈中略〉八月十一日職を褫ひ縛られ慶應元年正月

十四日夜新宮にて縊殺せらる年三十三歳

児玉次郎彦〈中略〉八月十二日昧早俗論黨の徒十數人其邸宅に闖入せんとす次郎彦適々外に在り歸途之に門外に遇ふ兇徒直に逼らんとす叱して曰く咄無禮漢もし事あらば何ぞ頭帽を脱して我家に來らざるやと兇徒を辟易し尾行して門に入る玄關に上り佩刀を脱せんとす一凶あり背後より逼る衆凶亂刀遂に斃る時年二十三歳

信田作大夫〈中略〉京都に留まり八月歸國本城清等と共に獄に囚はれ十四日夜縊殺せられ死骸を海中に投ぜらる年四十一歳

井上唯一〈中略〉歸國獄に囚はれ十月二十四日は河田佳蔵と同じく斬らる年二十三歳（注⑦）

徳山藩内訌時に発生した「殉難七士事件」や「三大夫賜死事件」等は実に大きな悲劇であったが、慶応元年正月四日征長軍総督尾州総督を謝罪恭順策により広島の陣営より東帰させ、同月一二日には越前副総督を小倉の陣営より東帰させた。当時禁門の変に敗れ、また馬関戦争の敗北により武備の極めて不備であった長州軍の状況を考慮すれば謝罪恭順策は最善の方策であり、ここに宗藩・徳山藩等の保守（恭順）派の政治的功績を認めねばなるまい。

慶応元年正月六日早朝、宗藩では高杉晋作を中心とする革新（倒幕）派が内訌戦を起し、正月七日には革新（倒幕）派諸隊は大田絵堂を完全に占領し、正月二一日には諸隊は山口に転陣した。高杉等は、正月二八日から政府改革に着手し、その結果宗藩では革新（倒幕）派が政治の要路に立ち、二月二二日には藩内が沈静したので毛利敬親は祖霊社の臨時祭を執行した。

徳山藩では、宗藩の大きな圧力のもと保守（恭順）派の政治の要路からの退陣が進められ、慶応元年六月一七日から一八日、福間一内・森主水の両人を当役、粟屋大炊・福間式部を加判役にするなど革新（倒幕）派を政治の要路に就かせた。（前掲註④参照）また、六月一六日には遠藤春岱・浅見栄三郎・増野友左衛門・江邨純一郎・浅見修次・入江弥源太が赦免となり、六

月一七日には光井左馬之允・井上佐市・渡辺新三郎が赦免となった。また同日、児玉次郎彦ら殉難七士の家を復興し、その遺族を優遇した。遠島になっていた林謹次の家の復興も許された。(注⑧)また一一月一一日には、富山要人は野島、本田和多利は大津島、飯田厚蔵・井上清兵衛・熊谷志登美・梅地央等は萩沖の見島にとそれぞれを流罪とした。実際には、要人と和多利は山口に送って入獄させ永蟄居を命じた。毛利元蕃は藩内が鎮静したので九月三日に祐綏社の臨時祭を執行し、就隆・元賢・元次三代の霊に自粛自戒を誓った。

飯田厚蔵は保守(恭順)派の一人として、徳山藩内訌時を駆け抜けて遂には徳山藩の幕末維新期における最後の大事件といえる明治九年(一八七六)一一月一日に勃発した徳山事件の首謀者となった。

飯田厚蔵は、文政一二年(一八二九)徳山藩士黒川範三郎の子として周防国徳山に生まれた。幼名を平九郎といい、次に厚蔵と改め後に端と称した。〔字〕は厚卿、〔雅〕を春瀬と号した。

彼は黒川十之丞の弟であり、飯田与兵衛以直の死亡に付き養子となり、御馬廻役として禄一五〇石を給された。与兵衛は飯田舎の子であり、舎は嘉永四年(一八五一)徳山藩御加判列になり、隠居御雇用人となり同年八月二五日参勤の御伴として当職奈古屋新十郎と共に江戸に行っている。与兵衛の妻は富山要人の妹であり、与兵衛の妹が養子厚蔵の妻となった。

若年の頃、藩学「興譲館」に入学して勉学し、その成績は藩中江村彦之進とその両雄と称されるほど優れていた。始め幕末維新期の儒学者である備後福山の江木鰐水の塾に遊学し、そこで塾長となった。安政六年(一八五九)には幕末期の儒学者で熱烈な攘夷論者であった。大橋訥庵の至誠塾に遊学し、そこでも塾長となった。その後学成りて帰国した。

万延元年(一八六〇)頃、飯田厚蔵は頼又次郎(頼山陽の次男)と交遊関係があり、安政六年(一八五九)の冬には頼又次郎を訪ねている。万延元年一二月一〇日付で彼が又次郎に当てた書状には、又次郎の弟でペ

リー来航後に尊攘論を唱え、安政の大獄事件で処刑された頼三樹三郎のことを悼んだ文言がある。この事実を通して、三〇歳前後当時の彼の政治思想を知ることができるのではなかろうか。（註⑨）

飯田厚蔵は文久元年（一八六一）八月一六日徳山藩西洋砲術世話方を拝命し、文久二年（一八六二）一二月一〇日に免職となった。同年一二月一九日には徳山を出発して京都に上り、文久三年正月に淡路守に随行して帰国した。その後、同年五月五日に御密用並郡代を仰せ付けられ、七月一四日には依願免職した。この頃飯田厚蔵は禄二三〇石を給されている。

文久三年正月藩主淡路守は京都から歸國、藩政の改革を断行した。当時厚蔵は革新（倒幕）派に属していたという。この事は次の史料からも推測できる。

【有志詰問録】　浅見政一氏所蔵

〈前文略〉同九月五日快晴、八時より於御客屋井上唯一御調べ〈中略〉○問同志ハ誰々ニ候哉可申出候△答天下ノ義士ハ皆同志、俗論家ハ皆同志ニ無之候、飯田厚蔵モ京師ニテハ同志ト思ヒ居候、〈後文略〉（註⑩）

飯田厚蔵は、文久三年の「八月十八日の政変」（堺町御門の変）後に保守（恭順）派に仲間入りしたという説がある。

元治元年九月一四日、宗藩の要請により徳山藩主淡路守は山口に呼び出されたが、その折に飯田厚蔵は随行した。また同年一〇月一日、山口に派遣され宗藩の保守（恭順）派政府と接触した。そして彼は同年一〇月九日には評定役を仰せ付けられたが、慶応元年一月一日には免官となった。その後、徳山藩は屯兵処を創設し、彼は屯兵処主管を仰せ付けられた。しかし、内訌時には保守（恭順）派に属し、保守（恭順）派が政治の要路を専有し始めた元治元年八月一四日から山口より宍戸備前・前原彦太郎（一誠）の両使が来徳した慶応元年六月一三日迄の一〇ヶ月間、彼はしばしば辣腕を揮ったため、その譴責を受け、同年七月五日には徳山藩は屯兵処を廃し、彼に遠慮を申しつけた。そし

て、同年一一月には見島に流罪となった。

明治四年（一八七一）七月一四日の廃藩置県後に彼は放免され帰宅を許された。（飯田家は、家柄没収ではなく本人のみの遠島という寛大な処置であった。）

帰宅後は、徳山で家塾を開き生徒を集め、漢籍を教えるなど子弟の教育に専念していた。

慶応元年六月に前原彦太郎（一誠）は宍戸備前と宗藩主の命により徳山に来てその藩論を正し藩政改革を促した。その関係で徳山藩士中には前原を知るものがあり、その中には所謂前原党と称する前原の同志が存在していて後年萩の乱に呼応する者がでた。明治八年（一八七五）一二月一〇日には飯田厚蔵は前原を訪ね同志として連絡をとった。明治九年一月二八日には徳山藩士今田浪江が東京から帰り前原と面会した。同年三月一日に飯田は前原・奥平謙輔等と連絡を取り合った。また、同年七月二五日には徳山藩士小野槇太郎が前原と面会し義挙について談じた。小野は今田・飯田・坂田等と同じく前原の挙に賛成し、早くから志を通じていた前原党の一人であった。同年八月六日には徳山から飯田・坂田が萩に出かけて前原と面会し連絡を取り合った。

同年一〇月二六日、前原は熊本の敬神党（神風連）の決起の報を受け、同志を前原邸（東光寺という説もある）に集め密議を行なった。その密議の結果、徳山に急使を送り同地の同志に兵をあげさせ、山口を攻撃させることを決定した。前原は直ちに奥平謙輔に「有志に与うる書」という檄文を起草させて、それを同志の一人小倉信一に託して徳山に急送させた。小倉は持参した檄文を徳山の同志飯田・坂田・今田等に手渡し、戦略を示してその決起を促した。その檄文は次のような内容であった。

徳山有志中ニ与フル書

昔者我忠正公悼朝廷之失職、憤徳川之違命、坐薪嘗胆、枕戈以待旦。而士大夫亦感其誠心、啜血相誓断死不顧。遂能安海内於一、以致諸聖天子。当此時木戸孝允等出入帷幄、寵任無比。而先君業掠

為已功、敢逞其胸臆、挙祖宗之土地、以献焉。其所為以法律為詩書、以収斂為仁義。講文欺公卿、藉夷狄脅朝廷。要之夷狄横行、海内疲弊、神州安危、朝不謀夕。則不唯先君之罪人、抑亦朝廷之賊臣也。廼者東肥人断諸於義。一戦鏖鎮兵、余威所及九州風靡。実曠世之一事也。諸君衣先君之衣、食朝廷之食、亦有年矣。乱賊之人、従而不誅、豈能忘於懐哉。始事雖譲于他県人、而収功猶有望於諸君矣。

十月二十八日　　前原一誠

徳山有志諸君　　（註⑪）

同年一〇月二九日に小倉から前原の檄文を受け取った飯田・今田・坂田等は、その檄文を街頭に掲げて同志を募った。そして一一月一日、萩の同志と南北相応じて山口を攻撃しようとして、先ず約三〇人の同志で山田村の堂宇に火を放って焼き払い、勢いに乗じて花岡警察出張所を襲撃した。また同地の某氏に強談して糧米八〇俵を確保し、軍を山口に進めようとしたが、官軍に阻止された。そして飯田厚蔵は捕えられて国事犯に問われ、七年の懲役に処せられ大阪の監獄に収監された。この徳山暴動に加わった主な同志は、次の史料で知ることができる。

〈前文略〉明治九年十月萩に前原の亂起り元治元年九月以後評定役飯田厚蔵（獄死）両人役阪田利之丞は久保村字山田に於て山田住今田浪江山田神官吉野一郎（獄死）及び小野牧太の徒と共に百姓を集め事を謀りしも忽ち失敗せるが如何にも時勢に通暁せざりしを遺憾とす。（註⑫）

また飯田は、在獄時には同獄の囚人たちに読書を教授し、そのため苦役につかされたという。彼は明治一三年（一八八〇）六月二七日獄中で病死した。享年四九歳。本正寺に埋葬。

おわりに

本稿は、徳山地方郷土史研究会「平成一五年度第二

回例会」及び「第二回例会」で研究発表したものの内その一部を選択し、加筆成稿したものである。

調査検討が十分でない面もあるが、与えられた紙幅の関係で特にこの度発表対象とした事件の中で興味を覚えた内山国雄と飯田厚蔵の経歴・業績などについて関係した事件に関するもののみ詳述し、その他の記述はできるだけ割愛した。

今後も調査検討を進め、「徳山地方の幕末維新期に活躍した群像たち」について、新しい視点に立って調査検討をしていきたい。

註

① 『徳山地方郷土史研究』第二五号　二四頁
② 徳山市史編集委員会編『徳山市史史料中』　一四〇頁
③ 新南陽市史編集委員会編『新南陽市史』　六六〇頁
④ 兼崎茂樹編『橙堂遺稿補遺』　三二三頁
⑤ 『徳山地方郷土史研究』第二五号　二五頁
⑥ 児玉如忠編『維新戦役実歴談』　四六二頁
⑦ 兼崎茂樹編『橙堂遺稿補遺』　一五五～一五六頁
⑧ 『徳山地方郷土史研究』第二五号　二九頁
⑨ 『徳山地方郷土史研究』第八号　一九～二二頁
⑩ 徳山市史編集委員会編『徳山市史史料中』　一四〇頁
⑪ 田村貞雄校注『前原一誠年譜』　一一〇頁
⑫ 兼崎茂樹編『橙堂遺稿補遺』　五一一頁

付記

本稿作成にあたり、多くの啓蒙書類の恩恵を受けているが、それらについては注記していない。